

都市生活

池澤夏樹

出典 『きみのためのバラ』所収

新潮社
400字詰原稿用紙32枚

「ご予約を変更なさいましたか？」と聞かれて彼はうろたえた。

「いえ、しなかったと思うけれど……」

「あの、これは三時半の便のご予約になっているんですが」

ゴヨヤクという言葉は耳障りだと思いつつながらカウンター越しに航空券を見ると、なるほどそうなっている。

数週間前に予約を入れた時に、早く帰るつもりで早い便にしたような気がする。その後、事態が変わって、その日の午後に予定がいくつも入った。忙しくて予約のことは忘れていた。三日前、出発に際して往復の航空券を受け取った時も確認をしなかった。いつものとおりの遅い便だと錯覚していた。

今は六時半だ。三時半の便は彼を乗せないままとつくだいに出してしまった。

「七時五〇分の便に空席はありませんか？」

「お待ちください」と言つて、係の女性はキーボードを叩き、ディスプレイをにらんだ。

「あいにく満席となっております。空気があれば問題はなかったのですが、明日から三連休ですのですねえ」

そう言われてはじめて、彼は空港ターミナル内の異常な混雑の理由がわかった。迂闊なことだ。

「七時五〇分と、その後にもう一便ありますが、空席待ちなさいますか？」

「ええ、お願いします。念のために明日の便の予約を入れてくれますか」

それも空気がなかったらと心配になったが、幸い朝早い臨時便に空席があった。これで明日には必ず帰れるが、できれば今日のうちがいい。

受け取った空席待ち整理券の番号は67だった。整理券を受け取っても帰ってしまう客が何割かいるし、他社の便もあるし、四百人以上を乗せる大きな機材ならば、空席待ちで二、三十人乗れることもある。

問題は荷物だった。乗れると決まったわけではないから、カウンターでは預かって貰えない。搭乗口まで持っていかなければならないが、今日の荷物は大きかった。おまけに一つは段ボールの箱で、手で提げられない。

結局、彼はカートに荷物を載せたままセキュリティ・チェックの列に並んだ。

先日の事件のせいでチェックはいつもより厳しくなっていた。

担当しているのは、いかにも不慣れで杓子定規な感じの若い女性だった。

「カートはこの先は使えません」

そういうことを言いそうなタイプだと思つたら、案の定そう言われた。

「空席待ちですからね、ぼくはこの荷物を搭乗口まで持っていかなければならないんですよ。」

手では運べないでしょう」

「でもカートはこの先では使えないんです」

「では、どうやってこれを持っていけばいいんですか？」と問い返した口調は少しきつかったかもしれない。

しばらく押し問答をしていると、上司らしい男性がやってきた。

「ああ、いいんだ。空席待ちの場合はいいの」

そこで荷物を、預けるはずのものまで、X線装置に通す。

「何か鉄のようなものが入っていませんか？」

やれやれ。

「入っていますよ。だつてこれは機内持ち込みではなく、預けるつもり荷物なんだから」

「拝見させていただけますか？」

「どうぞ」

彼は鞆を開いて、髭の手入れに使う小さな鋏を取り出し、相手に渡した。

「計つてよろしいですか？」

「どうぞ」

いちいち聞くまでもないだろうと思いつつながら、彼は担当者が鋏に物差しを当てるのを見ていた。

なぜこうも馬鹿丁寧でしかも押しつけがましい話しかたしかなかったのか。

それに危険物としてこれを預けるとしたら、乗る使もきまつていないのに、いつどこで受け取ることになるのか。空席待ちのシステムと、セキュリティのシステムの間に論理の隙間がある。

「はい。これはお持ち込みできる範囲内です。ご協力ありがとうございます」

それから彼は七時五〇分の便の搭乗口に行き、出発を待ったが、この便には乗れなかった。

次の便の搭乗口へ移動する間に空腹感がつのつてきた。六時半に空港に着けば、搭乗手続きを済ませてから夕食を摂る時間があるという計算だったのに、それが狂ってしまった。大きな荷を持って上の階のレストランに行っている暇はない。空席待ちというのはずっと搭乗口に張りついていないと機会を逸する。

結局のところ、次の便、つまりその日の最終便にも彼はあと四人というところで乗れなかった。

「やあ、よかったよかった。ぎりぎりだったな」とはしやぎながら機内に向かう人々から目をそらして、搭乗口を離れる。

搭乗口の脇にあつた公衆電話からモノレールで行けるホテルに連絡して一夜の宿を確保した。朝の六時にはまた空港に來なければならぬのだから近いホテルがいい。

搭乗口の側から外に出るのが問題だった。

セキュリティ・チェックのところを逆に出るのが最も簡単なのだが、最後の便も出てしまつた今、そこはシャッターが降りていた。

では到着の客と同じコースをたどるしかない。カートを押しながら通路を延々と歩いて、一階下に降りるためにはエレベーターを使い、到着ロビーに出る。

荷物は一晩コイン・ロッカーに入れておくつもりだったが、明日の朝のことを考えると出発ロビーまで運んでおいた方がいい。

またエレベーターを探して上の階に上がり、コイン・ロッカーに荷を入れて、暗証番号がプ

リントされた紙片を丁寧に財布にしまう。この期に及んでロッカーが開けられないなどというトラブルはまっぴらだ。

早朝の臨時便に席は取れたけれど、その後の便はすべて満席と聞かされた。乗り遅れたら後がない。

バックパック一つを背負ってモノレールに乗り、最寄りの駅で降りて、少し歩く。

ホテルのレセプションでまた問題が生じた。

クレジット・カードを提示して、回線で認証も下りたはずなのに、ホテル側は金額を書き入れてないクレジット伝票にサインしろという。

「ブランドの伝票にはサインはしません」と彼は突っぱねた。「それはどんな場合でもしてはならないことだし、客に求めてはいけないことです。あなたがたはぼくを信用していないかもしれないけれど、ぼくの方もあなたがたをそこまで信用していない」

しばらくの押し問答のあげく、ホテル側は引き下がった。

この時も、自分の口調が少しきつかったかなと彼は思った。たぶん空腹のせいだ。

しかし、言葉が通じないという感じはどこから来るのだろう。この晩、彼が議論した相手は二人とも「係」だった。それぞれにマニュアルに従って行動していた。セキュリティ・チェックでは、カートはここまでという決まりのことしかあの担当者は考えていなかった。大きな荷を持つて搭乗口に行かなければならないという彼の状況を理解する用意が彼女にはなかった。

言葉が働かない。頭の中にセットされた決まった台詞以外は出てこない。

ホテルでも同じことだ。レセプションの係は彼と論理的なやりとりをした結果、要求を取り下げたわけではない。うるさい客だから引き下がっただけだ。電話で当夜の予約を入れてすぐに来る一泊の客の場合は、泊まり逃げされないようブランドの伝票を取っておけというホテル

の方針が今夜から変わるわけではない。
そう考えると、疲労感がつのった。

部屋にバックパックを置いて、空腹対策という次の問題を考える。

こういうことの後だから、いい加減には済ませず、自分がちゃんと満足するものを食べたい。
しかしこのホテルで食事をする気にはなれない。

先ほど、駅からホテルまでの道の途中で、何かを目にしたのだ。意識のどこかに引つかかっている、何か好ましい記憶。

ロビーまで降りるエレベーターの中で記憶が鮮明になった。あれは小さな黒板に書かれたメニューだった。

どこか、店先に置かれた黒板に、オイスターという文字があつた。今の場合、牡蠣と白のワインという組合せは元氣のもとになるかもしれない。

牡蠣は好きだ。

彼はその黒板を探しながら、駅の方へ戻つた。一度見落として行き過ぎ、ふと振り向いて見つけたのは、その黒板が駅の方を向いていたからだ。

その店はビストロと呼ばれる類の簡易レストランで、黒板には日替わりのメニューが数点書いてあつて、上から二番目が「ワシントン州から空輸のオイスター」だった。

彼は店に入った。

「一〇時閉店ですけれども、よろしいですか？」

白いブラウスに黒いスカート、それに黒い長い前掛けを着けたウェイトレスが彼にたずねた。時計を見ると九時二五分。一人の夕食を終えるには充分だろう。

この界限でこの時間はまだ遅いのか、店の中には客は二人しかいなかった。どちらも女性の一人客で、彼はこの二人と向き合う中間地点の席に案内された。

まるでステレオのスピーカーのように、右前方と左前方に女が一人ずついて、それぞれに何か食べている。

あまりじろじろ見るわけにもいかないしと思つて、彼はぼんやり正面を見ていた。それでも二人は視野の隅に入っている。二人とも自分の皿を前にしている。左の女はもうコーヒートアイスクリームだが、右の方の女は料理の皿の前にナイフとフォークを使っているし、皿の左脇には赤ワインのグラスがある。

先ほどのウェイトレスがメニューを持ってきた。それとは別に、入口にあつたのと同じサイズの黒板と三脚も運んできて、彼の前に立てる。

改めて見ると、オイスターは一個二五〇円だった。なかなかの値段だ。一個が大きいのかなと彼は思った。半ダースでは多いかもしれない。四個としようか。

ワインはあと三〇分で閉店ということを考えると、一本では多いが、かと言ってグラスではもの足りない。そう思つてメニューを見てゆくと、気が利いたことにハウスワインならばカラフがあつた。ハーフ・ボトルの量だから、これがちょうどいい。

メイン・ディッシュはチキン・ソテーのケイジャン風というのにしようか。
しばらくしてウェイトレスが戻つてきた。

「牡蠣、大きい？」と聞く。

「オイスターですか？」

「そう」

わざわざ英語にしなくてもいいのに。

「ちよつとお待ちください」と言つて、ウェイトレスは厨房へ聞きに行った。

しばらくして戻ってくる。

「大きいです」

「では、それを四つ。あとはハウスインの白をカラフで。それにケイジャン・チキン」

注文は終わった。

あとは待つだけ。

左の女がコーヒーを飲み終えた時、携帯電話が鳴った。彼女はそれを耳に当て、嬉しそうに話した。会話は長くは続かず、彼女はそれをしまつて、そのままじつとしていた。何かを、あるいは誰かを待つているようすだ。

相手が何かしている時は顔が見やすい。そう思つて視線を留めて見ると、面長で、化粧も薄く、おとなしい顔立ちだった。歳は二十代の半ば。

右の女性は無表情に黙々と食事を進めていた。目の隅で捕らえたところでは、きちんと化粧をして、ものを食べながらも背筋が伸びている。皿の料理が何かまではわからない。

グラスの赤ワインは残り半分ほどになつていた。たとえ一人で食べる時でも、食事の喜びにワインを添えるのはよいことだ、と彼は考えた。歳は三十を少し過ぎたくらいか。グレーのニットの品のいいジャケットを着ている。ちらちら見ているうちに、ずいぶん整つた顔であることがわかつた。

彼のオイスターが来た。なるほど一個二五〇円だけあつて大きい。一口ではとても食べきれない。無理をして一口で食べてしまうのはもつたない。

味も濃厚で、みつしり中身が詰まつている感じだった。さらりと軽いいかにも養殖の痩せた牡蠣とはまるで違う。能登の岩牡蠣のよう。香りは少し乏しいけれども、味と量感はそれを補つ

てあまりあった。

なかなかいい展開ではないかと思ひながら、彼は牡蠣を食べ、白のワインを口に運んだ。ハウスワインだからお任せだがこの牡蠣には合っていた。

よく味わいながら、彼は少しずついい気分になってきた。飛行機に乗れなかつた不満がじわじわと解消されてゆく。ほぼ月に一度、飛行機を使って首都に来ているのだから、たまには乗れないことがあるのもしかたがない。

この前、乗り損なつたのは、一昨年夏、台風で、乗るべき便が欠航になつた時だつた。

欠航で見捨てられた乗客は次の便の席に閑しては何の権利もない。空席が出るのをひたすら待つしかない。たいていは航空会社が臨時便を出して積み残しの客を運ぶのだが、あの時は、900番台の整理券を持つて、一日空港の中をうろろしてようやく夕方方の便に乗つたのだつた。

今回は明日の朝の便が確保されている分だけましだ。ともかくこのオイスターはうまいし、女性二人の姿をそれとなく見ているのだつて悪くない。

そこまで考えた時、店の入口から男が一人あわただしく入つてきた。それを見て左の女は歓声をあげて立ち上がった。待つていた相手らしい。

男はスーツを着て、その上に薄茶色のコートを羽織つてゐる。手にはアタッシュ・ケース。一緒に夕食をと約束していたのに、仕事が長引いて遅れてしまった。携帯電話で女に謝り、一人で食事を済ませてくれるよう頼み、もうすぐ行けるとまた連絡し（それがさつきの電話だ）、そして今来た。そういうことの流れが手に取るように見えた。

男は彼女の伝票を手にとって、彼女を抱きかかえるようにして、速やかに店を出ていった。その騒ぎが収まつた時、あの男の襲来はまるで一陣の嵐のようだったと彼は考えた。この印

象を共有できるかなと思ひながら、右の女の方をちらりと見たが、しかし、彼女はメイ・デッシュを終えて、無表情に虚空を見つめて次の皿を待っているだけだった。きれいな顔だが、最後の客として二人だけ店内に取り残されたという状況は会話のきつかけにはなりそうにない。そこまで考えて、そうだ、今、俺は会話が欲しいのだと気づいた。係や担当者やレセプションやウェイトレスを相手のマニュアル的なやりとりではない本物の会話。

彼もオイスターを終えて、次の料理を待つ段階に入った。ワインはまだだいたいぶある。大雑把に切ったバゲットにバターをつけて口に運びながらワインをゆっくり飲むというのは、それはそれで悪くない。

ウェイトレスが彼の前を通って次の皿を女のところへ運んでいった。

デザートとコーヒードった。大きな皿に何かケーキとアイスクリームが載っており、フルーツ系のソースと生クリームと苺の飾りがあつて、ケーキには白い砂糖のフロステイニング。

デザートはたいの食事の彼がオミットする部分だ。でもそれが好きな人があることは理解できる。俺ならばコニヤックが望ましいが、デザートという人もいる。特に女性の場合は。

そんなことを考えながら、彼は見るともなく皿の行く先を目で追っていた。

その皿がテーブルの上に置かれた時、それまでになかったことが起こった。女の口元が緩んだのだ。

彼女は思わずふつと笑っていた。

そして、ナイフとフォークと浅い大きなスプーンを交互に使って、ゆつくりと、少しずつデザートを賞味しはじめた。

その動作に彼は感動した。見ていると彼女は本当においしそうにデザートを口に運んでいる。ほとんど陶然たる表情になっている。

食べ物人は幸福にするという原理の証明のような、開けつびろげの喜びの顔。

彼のチキンが来た。これも期待を裏切る味ではなかったし、ピメントの強い香りと辛さは食欲を刺戟した。しかし、陶酔に至るほどではない。あのデザートほどではない。

チキンをしばらく食べたところで、ちらりと女の方を見た。

彼女はデザート最後の部分をいかにも惜しげに口に運んでいるところだった。目が合った。

その席に彼が坐つてからはじめて目が合った。

そこで、彼女はにっと笑った。

「おいしそうですね」と彼は言った。今なら声を掛けてもいいだろうと思つたのだ。

「ひどい一日だったの」と、最後の一口を食べ終えて、女が言った。

「そう。ぼくもですよ」

女は彼の返事を無視した。

「本当にひどい一日だったのよ。あなた、聞いてくれる？」

「ええ、喜んで」

女の少しぞんざいな口のききかたを好ましいものに思いながら、彼は言った。

彼女はコーヒーのカップを受け皿ごと手に持つて、彼の前に移つてきた。

目の前に坐つたところを見ると、本当にきれいで、いきいきとして、いい顔だった。口が大きいので、笑顔が映える。

デザートで元気になつた分だけ輝いている。たぶん心のありようが顔に出やすい性格なのだろう。

「母がねえ、わたしのお金を持って消えてしまったの」と女はいきなり言った。

「お母さんが？」

「そう。男に弱い人なのよ。いつもつまらない男にひつかかって、いつも大騒ぎして、いつも捨てられる。それでも懲りないのねえ」

「なるほど」

酒で口が軽くなるタイプがいるが、この人は甘いもので口が軽くなっているのかもしれない。それとも、一日の終わりの解放感か。

「今度もまたそうだったの。わたしも一度会ったことがあるんだけど、今度の男は特別に悪い奴みたいに見えたのよ。あんな男は駄目よって言ったんだけど、母は聞く耳を持たないで」

「まあ、恋というものは……」

「そう。恋なのよ。毎回毎回。ただねえ、それが軽い。大騒ぎして、ばたばたして、結局は帰ってくる。いつも捨てられて帰ってくる。あれを見ると、わたしの方は男に近づく気もなくなるわねえ」

「そういうものかな」

「母は今度は違うって言うっていた。いつもそう言うんだけど。それでも今度はたしかに様子が違っていた。それはつまり今回は以前のどれよりも重症だということだったのね」

「真剣な恋？」

「母はいつも真剣なのよ。そこが問題。だけど今回は特別に相手が悪くて、いつもよりずっと深いところまで連れていかれたって感じだったのね。これはよくないなってわたしは思っていたのよ」

「立ち入ったことをうかがうようだけど、お父さんは？」

「父という人はわたしが七歳の時に亡くなったの。母は働いていたし、かつかつ食べるのには

困らなかつた。そうして母の近くでわたしは育つた。だからわたしは母のいくつもの恋を延々と見てきたわけ」

「批判的に？」

「そう、批判的に。そして、昨夜、仕事を終えて、疲れて家に戻ったら、テーブルの上に母の置き手紙があつたの。『ちよつと事情があつて、あなたのお金を借ります。いずれ必ず返すから心配しないで。かしこ。母』、それだけ。その横には空っぽになつた定期預金の通帳と印鑑が置いてあつた」

「娘のお金まで持つて男のもとへ走つた？」

「そのとおり」

女は力を込めて言つた。

「母から娘への手紙でなにかかしこよ」

「たしかに変だな」

「というわけで、今日わたしはあちらこちらに電話を入れて、母を捜して、もちろん見つけられなくて、お金のことも腹が立つけれども、それよりもまた無一文になつて帰つてきた時の母の愁嘆と弁明を聞くのかと思うと、これがまたやりきれないのよ」

そこで女は彼の目を正面から見た。

「いやでしよう、愁嘆と弁明なんて？」

「ええ。よくわかりますよ」と彼はいきなりの問いにどぎまぎしながら応じた。

「そう、いつだつて愁嘆と弁明なのよ、母は。でもね、その一方で、こんな母と娘の関係こそいわゆる共依存の典型だと思うといよいよわたしはやりきれなくなつたのね。今回こそはいい機会だからはっきり母と縁を切ろうかと思つたけれど、でも、母名義の家を売つてしまうわけ

にもいかないし、結局のところ縁が切れるはずがないんだと思ったりして……」

「あなたも恋をするというの？」

「駄目よ。それでは親子共倒れになってしまいうじゃない。二人とも男の犠牲になってしまう」

「そうかな」

「そうよ。わたしは男が嫌いなの。たぶん母を見て育つたせいで。だから距離を置くことにしているの」

「なるほど」と彼は言った。

「というわけで、ひどい一日だったわけ」

「よくわかる」と彼は言ったが、相手はまるで聞いていない。

「今日は仕事もトラブルが多くて、やれやれの気分でこの店に来て、なんとか自分を元気づけながらメイン・ディッシュを食べたのよ。それらもろもろ、あげくの果てのあのデザートだったわけ」

「よくわかった」

「でしよう」とまた女は力を込めた。

「デザートのおかげとあなたに話をしたおかげでだいぶ元気になったわ。これで、また何か月か後に母の愁嘆と弁明を聞くことができそうだわ。もう本当にこれつきりにしてほしいって言えそう」

「お母さんの今度の恋は、今度こそ本物かもしれない」

「無理だと思えけれど、一応その可能性も除外しないでおくわ」

「万一また愁嘆と弁明という結果に終わったら、今度は預金通帳をお母さんが知らないところに隠す」

「そうね。それはいいアドバイスだわ。ぜったいそうしよう」
女は立ち上がった。

「いきなり知らない人にこんな話を聞かせてしまつてごめんなさいね。でもねえ、きつと知らない人だから話せたのよ」

「なるほど」

「あなたのチキン、冷えてしまつたわ」

そう言われて、彼は自分が女の顔を見て、その話を聞くのに夢中で、ずっとチキンに手をつけていなかったことに気づいた。

「いや、まだ食べられる」

「そう、それならいいけど」

女は自分のテーブルに戻つて大きなバッグとコートと伝票を取り、また彼の方を見た。

「じゃあね。ありがとう」

「いや、こちらこそ」

「ねえ、あなたの牡蠣の食べかたも、すごくおいしそうに見えたわよ」

そう言つて、彼女は大股に店を出て行つた。

彼の心中には三つの不満が残つた。第一に、彼女にはああ言つたが、やはりチキンは冷えてしまつて、味が落ちていた。第二に、ずいぶん親密な話を聞いた相手なのに、その仲はこのまま途切れてしまう。数か月後、デザートを終えた後の元気な彼女にまた会つて話を聞きたい。母の恋のその後を聞きたいが、その機会はない。

第三に、なぜ彼が彼女のデザートと同じくらいまそうに牡蠣を食べていたかという理由を

話せなかった。彼にとつてもいかにひどい一日であつたか説明する機会が与えられなかった。しかし、恋に狂う実の母に定期預金を持ち逃げされたのに比べれば、飛行機に乗りそびれたなんて愚痴として軽すぎるだろう。やっぱり男つてバカなのよね、と言われるのがおちだろう。